

外国につながる高校生の学校適応

The School adjustment of High School Students related to foreign countries

小川 洋二

OGAWA Yoji

要旨 近年、日本の学校で増加している外国人や日本国籍を持つが外国にルーツを持つ子どもたちを外国につながる子どもたちと呼ぶ。本研究は関東地方のA県B市にあるC商業高校定時制（夜間）での参与観察から、フィリピン系のD子（女子、父が日本人で母がフィリピン人、フィリピン生まれで日本育ち、日本国籍）の入学から卒業までを記述し、経済資本・文化資本に恵まれない彼女の学校適応を支援した社会関係資本を明らかにする。

1 外国につながる子どもたち

外国につながる子どもたちとは、外国人や外国に関係する子どもたちである。外国人の子どもたちはニューカマー¹⁾、在日韓国・朝鮮人や華僑などのオールドカマーである。小・中学校ではブラジル人が多く、高等学校では中国人が多い。外国に関係する子どもたちは、外国にルーツを持つ子どもたちや帰国子女である。

ニューカマーの子どもたちは、第一に中国人、第二に南米からやって来た日系人（ブラジル人・ペルー人）である。家族連れで日本に働きに来る中国人が増え²⁾、その子弟が日本の小・中学校を経て高校に進学するケースも増えてきた。工業地帯では、家族を伴ったブラジル人やペルー人が多数居住し³⁾、子弟が地域の学校に通っている。日系人は日本の姓と、カタカナの名前⁴⁾を名乗っていることが多い。第三は日本人男性と外国人女性の国際結婚で生まれた子どもで、外国で育った後に日本に来る子どもたちである。第四は母親の再婚で日本に呼び寄せられた子どもたち⁵⁾である。近年、国際結婚が増え、日本の婚姻件数の5%を占めたのが2001（平成13）年のことである。その後やや低下し、2015（平成27）年は3.3%となっている⁶⁾。国際結婚の中には再婚も含まれ、外国人の妻が、母国に残してきた子どもを夫の理解の下、呼び寄せることも多い。母の再婚相手の日本人男性（義父）と養子縁組をすることもある。

ニューカマー以外で多いのは在日韓国・朝鮮人であるが、日本風の通称を使うことも多く学校では目立たない。近年は日本人との通婚も増え、日本国籍の取得（帰化）も増えている。父母や祖父母が外国人の子どもたちは、国際再婚で呼び寄せられた子どもたちと違い、日本国籍を持つ者が多い。日本生まれの者もいるが、外国生まれの者や、外見は日本

¹⁾ 1980年代急増した新来外国人のこと。日本語を母語としない人たち、とも言う。

²⁾ 例えば中国料理店で働く中国人調理師は労働ビザが発給され、その子どもたちは家族ビザが下りる。インド料理店で働くネパール人・インド人調理師たちも同様である。

³⁾ 静岡県浜松市や群馬県大泉町が有名である。

⁴⁾ 例えば佐藤アレサンドロ（男子の名前）という氏名である。

⁵⁾ 母親はフィリピン人やタイ人が多かったが、近年は中国人が増えている。

⁶⁾ 厚生労働省の人口動態調査（平成27年）によると、2015（平成27）年の日本人の婚姻における国際結婚の割合は3.3%であった。参考までに2001（平成13）年は5%で最も高かった。

人に見えない者もいる。また、近年は外国に赴任するビジネスマンが増え、子どもたちを連れて行く家族も増えた。日本人学校は義務教育までなので、高校進学に合わせて子どもだけ帰国させる家族もある。

2 C商業定時制

2.1 C商業定時制の特色

関東地方A県B市にあるC商業高等学校には全日制の課程と定時制⁷⁾の課程がある。定時制は夜間に授業をおこなう単位制⁸⁾で、17時20分から始まる授業（1時間目）の前に0時間目（16時30分～17時15分）を設定し、定時制の授業の履修・修得により3年間⁹⁾で卒業できる。他にアルバイトで単位を認定する制度¹⁰⁾や各種検定取得を単位として認定する制度¹¹⁾もある。未修得科目の単位を追認審査で認定する制度もあり、弾力的なカリキュラムを持つ。そのため、卒業生の過半数は3年で卒業している。毎日5時間の授業を3年間受けた生徒が、2単位の科目を一つ未修得（不合格）になると73単位の修得となり、卒業単位に1単位不足する。その場合、アルバイトで増加単位を申請するか、検定試験合格で増加単位を申請することが多い。6年かかって卒業する者もいるので、最終的に入学者の4～5割が卒業する。2015年度のA県の指導主事訪問では「教員と生徒の関係が良好で、他の定時制と異なり、落ち着いた授業が行われている。」と高く評価された。服装・頭髪は自由である。A県に二校ある三部制定時制高校の夜間部には午前部や昼間部と共通の制服があるので、全日制との違いが少ない。

C商業全日制には制服があるが、定時制には制服は無い。但し、上履きは指定されている。この上履きは全日制と同じデザインでラインの色が異なる。全日制の上履きは学年ごとにラインの色が三色あり、これに定時制の色を加えると四色となる。自転車通学の生徒が自転車に貼るステッカーも全日制の三色（学年ごとに色違い）と定時制の一角で四色ある。体育の授業では、指定のトレーニングパンツを着用することが義務づけられている（上履は自由）。入学時の費用は全日制より少ない。

服装頭髪は自由だが、校内や学校周辺での喫煙や自動車・オートバイ通学は成人も含めて禁止であり、違反して指導を受ける者もいる。

学年の定員は商業科2クラスの80人である。中学校卒業生が多かった2011（平成23）・2012（平成24）年の新入生の定員は3クラスの120人（実際は4クラス）であった。D子は、2012（平成24）年の入学生で、入学者は定員の120人だった。前年の入学者も120人であり、D子が入学した時期は、C商業定時制の生徒が最も多かった。2013（平成25）年からは定員が2クラス80人（実際は3クラス）に戻った。2013年からは中学校卒業生の人数が減っ

7) 定時制は英語では「night school」の他に「part time high school」といい、文字通り一日当たりの授業が少ない学校である。4年間で卒業するのが標準である。

8) 学年制ではなく、生徒が授業を選択して卒業単位を修得すれば卒業となる。同じクラスでも時間割が異なることが普通である。

9) 現在高等学校の卒業に必要な単位は74単位以上となっている。C商業定時制で3年間、毎日5時間の授業を月曜日から金曜日まで履修して修得すると75単位の履修・修得となり、3年で卒業できる。

10) 商業科の「総合実践」（2単位）の実務代替による増加単位となる。アルバイトを1日3時間以上かつ週4回以上おこなっていれば、半期で1単位、1年で2単位を増加単位として認める。

11) 全国商業高等学校協会（全商）の簿記検定3級なら1単位、日本商工会議所（日商）の簿記検定2級なら3単位の増加単位を認定する。

たことや三部制定時制高校や全日制的アクティブスクール¹²⁾に受検生（学力検査を受ける生徒）が流れたこともあり、定員を割っている。前期・後期・二次募集・追加募集の4回まである学力検査（入学試験）で定員を充足できない。2016年の入学者は55人で3クラスに分けた。D子が入学した年は、新入生のクラスの人数は30人である。近年は本当の少人数学級で、生徒が落ち着いてきた。2015年の指導主事訪問の際のコメントに多くの教員は共感している。

教職員は50代が多く、40代は若手である。定年退職後に再任用となった60代の教員も数名いて、教職員の経験値は高い。30代は少なく、20代が数名いる。20代のほとんどは一年契約の臨時的任用講師（校務分掌を持つ常勤職員）か非常勤講師（校務分掌を持たず授業のみ担当）である。

生徒は多様であり、中学校時代に不登校だった者が多い。全日制高校を不合格になった後、受検した生徒もいるし、入学しやすい定時制を最初から希望して入学する者もいる。生活保護を受けている家庭や兄弟姉妹が多数いる家庭の割合が高い。学力は低い者が多いが、高い者もいる。他の高校を中退して入学してくる者もいる。他の高校で修得した単位を認定してもらい、時間割に空き時間が有る者もいる。学習障害や発達障害を持つ生徒は多い。外国人生徒も多く（中国人・フィリピン人など）、日本国籍だが親の一方が外国人の生徒も多い。A県に一校だけある夜間中学校¹³⁾からは毎年のように新入生が来る。

部活動は4時間目が終了した後におこなわれる。21時50分には校舎全体にアラーム警備をかけるため、21時40分には終了する。部員が多いのはバスケットボール部であり、自前でチームが組める。軟式野球部やサッカー部は部員が足りないため、他の部活動から部員を借りて大会に出場している。ダンス部や写真部・演劇部・簿記部・情報処理部などもある。日商簿記2級（高校卒業程度・企業で評価されている検定）に合格する生徒も時折いる。合格者は簿記部に入って個人指導を受けている生徒や社会人が商業科目を学ぶ経理コース¹⁴⁾の生徒がほとんどである。

時程表から読み取れるC商業定時制の特徴は、ショートホームルーム（SHR）や清掃の時間が無いことである。諸連絡は電子掲示板を通じておこなわれる。担任からの連絡は、教室の黒板の左側に書かれる。（全日制は右側に書くことになっている。）定時制の掲示物

表1 C商業定時制の時程表

0 時限	16時30分～17時15分
1 時限	17時20分～18時05分
2 時限	18時10分～18時55分
給 食	18時55分～19時20分
3 時限	19時20分～20時05分
4 時限	20時10分～20時55分

¹²⁾ 小中学校の学び直しを積極的におこなう高等学校。

¹³⁾ 正式には夜間学級といい、15歳を過ぎた者が学ぶ。生徒の9割以上が外国人である。

¹⁴⁾ 高校卒業以上が入学資格で商業科目のみを2年間で学ぶコース。3年次に編入する。短大や大学の卒業生もいる。生徒は30代・40代・50代が多い。社会人の再教育のコース。

は黒板の左側の掲示スペースを使用する。定時制の教室は、全日制との共用である。通常は16時に定時制が引き継ぐ。但し、全日制が7時限授業を実施する火曜日は全日制の帰りのショートホームルーム（SHR）が16時05分に終わるため、定時制が教室を引き継ぐのは16時10分である。火曜日の16時過ぎのC商業は、廊下や階段が人で一杯になる。

清掃の時間が無いので、定時制の担任が教室の清掃・ごみ出しを放課後にする。C商業全日制では火曜日のみ清掃が無い。7時限が終了したら早く教室を明け渡すため、その代わりに昼休みにごみ捨てをおこなう。生徒による清掃活動はC商業定時制には無い。

C商業定時制ではロングホームルーム（LHR）を行事のように特別な時間割として実施している。A県の高校では県指定の教材を使用して道德の授業をすることが義務づけられている。C商業定時制でも道德の授業は実施されているし、学期始めや長期休業前にはロングホームルーム（LHR）はある。学期途中でも交通安全講話や人権教育などの全校集会が開かれる。これもロングホームルーム（LHR）扱いである。

2.2 給食

給食の時間は25分しか設定されていないが、空腹を満たすだけでなく、友人と語らい、教職員が生徒に連絡をする重要な時間とも言える。担任はあらゆる時間を使って生徒に連絡をする。始業前や放課後に電話を使って連絡するが、登校時の昇降口や自分の授業で連絡したり、他の教員に授業で伝言メモを渡してもらう。生徒の授業が終わるのを廊下で待つ。一緒に給食を食べながら、重要な連絡事項を伝えたりもする。D子と私は給食の時間を共にすることが多く、卒業するためにどうしたらよいか、折に触れて話した。A県では夜間定時制の給食を財政的な理由で廃止しようという動きがある¹⁵⁾のは残念である。経済的な理由やアレルギー・好みが合わないなどで給食を食べない生徒もいるが、給食の時間は教室にすることが多い。担任は教室にいる生徒を訪ねて連絡事項を伝えている。

食堂が校舎の一階の隅にあるため、二階や三階の教室で授業をすることが多いC商業定時制では、給食の前の2時間目の授業は少し早く終わらせるのが慣例である。その代わりに3時限の授業開始（19時20分）の5分前（19時15分）になると、給食容器を片づけて教室に行くよう、職員が生徒に促す。4月は新入生が慣れないために片付けが間に合わないこともあるが、5月になると19時15分には食堂から生徒はいなくなる。A県では経費削減のため、夜間定時制の給食は業者が製造したものを学校に配達するデリバリー方式である。但し、献立は学校職員の技師（栄養士）¹⁶⁾が決め、ご飯や汁もの（味噌汁やスープ）は学校で容器に入れるようにしている。できるだけ温かいまま食べられるように配慮している。給食の費用は一食当たり310円（現在）である。これは材料費であり、A県は業者に調理費用（委託料）を支払っている。だから一食は310円の倍以上の価値があるが、費用を前納することになっている。前納できないために給食を食べられない生徒が多数いる。他に「食事が合わない」・「アレルギー」・「不登校」などで食べない生徒もいる。定時制の常勤職員は全員食べており、一食310円を納める。

給食には隠れた効果がある。食堂に入るとまず石鹸を使った「手洗い」をしなければな

¹⁵⁾ 2016年度では、A県では夜間定時制5校で給食が試行的廃止となっている。

¹⁶⁾ 技師（栄養士）は行政改革のため、2校を兼務する。C商業定時制に週3日・F高校定時制に週2日勤務する。技師（栄養士）がいない日は、学校給食委員会の教職員が生徒の指導をする。

らない。その上で手を「アルコール消毒」する。食中毒を予防するためだが、「手洗い」と「アルコール消毒」の効果で、インフルエンザなどの「感染症」がC商業定時制の教職員には少ない。生徒は給食を食べない者がいるので、単純に比較できないが、全日制に比べて感染症が流行することは少ない。また「同じ釜の飯を食った仲」の表現通り、給食を通じた「連帯感」が生徒や教職員にはある。欠席者がいて余った場合は、お代りできる。A県では喫食者の減少や社会の変化を理由に、2015年度から夜間定時制の給食の「試行的廃止」を始めた。2016年現在、県下5校の夜間定時制で給食が「試行的廃止」になっている。「試行的廃止」になった5校はさまざまな地区にあることから、給食の全面廃止をA県が目指していることが考えられる。夜間定時制の給食の継続・復活を望む。

2.3 フィリピン系高校生

フィリピン系高校生とは、フィリピン人高校生と日本人とフィリピン人の国際結婚で生まれた高校生のことである。C商業定時制では中国人生徒に日本語を教える正規の授業を編成している¹⁷⁾ので、中国人生徒の存在が知られているが、他にフィリピン人生徒もいる。現在、C商業定時制には約160人の生徒が在籍しているが、その中に中国人が10人、フィリピン人が5人いる。学校では厳密な国籍調査はできないのでこれは概数だが、生徒の約1割が外国人である。新入生55人の中で外国人は8人（中国人5人・フィリピン人3人→フィリピン人1人は夏休み後に退学して帰国）と割合が若干高い。父が日本人で母がフィリピン人の生徒が数名¹⁸⁾いて、フィリピン系という表現を使用した。このタイプの生徒はどの学年にもいる。父が日本人で母がタイ人の生徒が2人、父がアフリカの出身で母が日本人の生徒も1人いる。いずれも日本国籍と思われる。2016年度の初め、上級生のフィリピン人生徒が「～君はお母さんがフィリピン人だ。」と話してくれた。その生徒に親近感を持っているようだった。家族の氏名を見ると、母がカタカナの名前で外国人だとわかる生徒がいる。

過去には日本人だと思っていた生徒3人が「自分は日本人でなく、外国人だ。」と告白した。1人はフィリピン人の同級生と受けている授業中に告白し（フィリピン人在校生）、授業中に「自分は外国人だから漢字が読めない。」と言った生徒もいた（フィリピン人在校生）。放課後の体育館で「日本人ではない。」と話した者も1人いた（日系ブラジル人卒業生）。3人とも日本人と同様な氏名を名乗っていたので、私は日本人だと思っていた。（1人は母親が外国人だと思っていた。）外国人や親の一方が外国人の生徒が多数いる環境と私を信用して告白してくれたのだと考えている。

3 事例研究－フィリピン系のD子－

3.1 D子のプロフィール

D子は2012年4月にC商業定時制に入学して、2016年3月に卒業した。4月生まれなので現在は20歳である。本人から卒業後に20歳になったら仮名を用いてデータを使用する許

¹⁷⁾ 外国語の「日中文化研究」（学校設定科目、3単位）は中国語と中国文化の基礎を教える科目だが、ニューカマーの中国人の新入生に別教室で別の教員が日本語と日本文化の基礎を教える。

¹⁸⁾ 2012年からの参与観察で概数は把握できる。だが、ひとり親家庭がC商業定時制には多く正確に把握できない。

可は得ている。C商業定時制では、3年で卒業を希望する生徒が多く、卒業生の過半数は3年で卒業している。3年で卒業を希望しながら退学する生徒や卒業が延びる生徒もいるが、D子は最初から4年で卒業することを希望し、0時間目を履修しなかった。D子は「勉強が苦手なので、毎日5時間の授業を受けると単位を全部取れない、と思ったからです。」と1年次に語った。また、「父親は日本人で母親はフィリピン人、フィリピン生まれで生後数か月の時に飛行機で日本に帰国した。自分はそのことを覚えていないが、2歳上の兄は記憶している。」とも語っている。1年生では退学する者や長期欠席する者が多いので、遅刻や早退はあるが、登校日数が多いD子は面談や雑談をする回数が多く、自然と家庭の状況が把握できた。

表2から3年次までは登録した科目をすべて履修（出席が充足している）・修得（合格して単位を取得）していることがわかる。4年次は3単位（1科目）が未履修（出席不足）となり修得できず、卒業の最低基準の74単位の修得で卒業できた。D子の家庭は入学時に生活保護を受けていた。2歳上の兄が高校を卒業して就職したので、4年次では生活保護を受けていなかった。家族は父（日本人、50代後半）・母（フィリピン人、40代後半）・兄（全日制高校3年）と本人の4人だった。父は病気で働くことができない。母は働いているが、生活費が不足し生活保護で補っていた。

私がC商業定時制で参与観察を始めたのは2012年4月¹⁹⁾であり、最初の2年間は中国人生徒を主に調査していた。その調査の過程でD子のような国際結婚で生まれた生徒の存在に気づき、彼らの参与観察もおこなっていた。その中で、D子は入学から卒業までの4年間でクラス担任として参与観察した生徒である。D子の1年次のクラスは30人で、中国人が2人（男子1人とY子）、他に日本人だが、国際結婚で生まれた生徒が3人いた。D子はその1人である。他に風貌・名前から親の一方が外国人と思われる生徒が2人いた。はっきりしない理由は、ひとり親家庭であったためと、欠席が多かったためである。1人は不登校の後に退学し、もう1人は不登校を続けて学年末に通信制高校に転学した。2人ともその後の調査が出来なかった。

表2 D子の履修・修得状況

	履修登録（単位）	履修（単位）	修得（単位）
1年	20	20	20
2年	20	20	20
3年	20	20	20
4年	17	14	14
合計	77	74	74

¹⁹⁾ 私はA県の公立高等学校の教諭であり、2012年4月、人事異動でC商業定時制に異動した。当時は博士前期課程の学生であり、C商業の校長（全日制と定時制兼務）に大学院生として外国につながる高校生の研究を行っていることを報告した。以後、校長や定時制の副校長には生徒の調査・分析を行っていることを報告し、許可を得ている。現在まで3人の校長（C商業）の下で働いたが、大学院で学び研究していることは認められている。生徒にも大学院生として学び、外国につながる高校生の研究をしていることを説明している。

D子とその両親に出会ったのは2012年4月の入学式の日である。父が日本人で母がフィリピン人であることは容姿ですぐわかった。この時は父が病気で働けないことを知らなかった。定時制では入学式に保護者同伴で出席するように通達があっても、欠席者（保護者と新入生両方）もいるし、新入生だけ出席して保護者が来ないことも珍しくない。D子のように両親がそろって入学式に出席するのは少数派である。2012年は中学校の卒業生が多く、二次募集でC商業定時制は定員（120人）を満たし、再入学²⁰⁾の1人を加えて1年生は121人（4クラス）で始まった。同僚に学力検査（入学試験）について聞くと、最終的に数名が不合格となった、とのことである。

受付をおこなった食堂は増築前で、新入生と保護者でいっぱいだった。欠席者もいたが、遅刻者も多く騒然としていた。1年生の担任4人のうちの3人は転勤してきたばかり（1人は定時制からの転勤）で、学年主任はC商業定時制勤務が6年目となるM教諭であった。1年生の担任となった3人の他に転勤でC商業に赴任した者が1人いたが、2年生の担任となった。異動で来た者が全員担任となったのは、担任希望者が少ないからである。担任希望者が少ない学校は生徒が荒れていて、問題行動が多く生徒指導が大変な学校だと一般に考えられる。事実、入学式の前日の始業式や新任式では2年生が騒がしかった。秋からは1年生も2年生も少し落ち着いてきたが、2012年度は特別指導と退学者・長期欠席者²¹⁾が多かった。

3.2 下級生の時のD子

D子は入学当初、小学校5年生からの同級生のY子（中国人）と一緒にいることが多かった。D子はC商業から徒歩で30分ほどの地区に住んでいた。出身中学校からは毎年、全日制と定時制両方に多数入学する。その中学校からの入学者は通常自転車通勤する。しかし、D子はY子とともにバスでC商業の最寄駅の隣の駅に出て、さらに電車に乗ってC商業に通っていた。楽だが距離の割に時間がかかる。さらに費用が高い。夜間の通学・帰宅は危険と家庭では考えていたらしい。クラスは30人が在籍し、おとなしいD子はなかなか同級生の名前を覚えられなかったが、Y子と一緒にいたので孤立することはなかった。さらにB市外から通うI子（3年で卒業）や市内の別の中学校から入学したS子（D子と一緒に4年で卒業）と友人になり、落ち着いた生活を送ることができた。単位制の学校なので、時間割が友人と完全に一致することは無いが、1年次はクラスごとの授業²²⁾があるのと、給食の時間は友人と過ごせるので、C商業定時制で孤独を感じることは無かった。但し、クラスでは問題行動を起こす者が何人もいたから、夏休みまでは落ち着くことがなかった。そこにD子にとって最初の危機が訪れた。夏休み直前、Y子が病気の父の療養のため中国に帰国したのである。Y子は「中国に帰りたくない。C商業を卒業したい。」と言った。Y子の日本語の会話能力は高く、日本語が話せない両親の為によく学校を休んで病院や役所に行った。学力は高くなかったが、落ち着いた生活態度だったので同級生の男女から好感

²⁰⁾ 自己都合で退学した生徒は、2年以内ならば面接による選考を経て再び入学することができる。

²¹⁾ C商業定時制に入学する生徒の多くは中学校の時に長期欠席をした不登校生徒であり、高校入学後も長期欠席を続ける者が多い。但し、三カ年皆勤でC商業定時制を卒業する生徒もいる。

²²⁾ 商業科目の「簿記Ⅰ」（4単位）・「ビジネス基礎」（2単位）・「商業技術（情報処理系科目で文書作成が中心）」（2単位）や保健体育科の「保健Ⅰ」（1単位）などはC商業定時制の必修科目である。

を持たれていた。結局Y子は日本に戻る目途が立たなかった。9月にB市在住の叔母を通して退学手続きを取った。このことを知った成人のO男（3年で卒業）は、「一緒に卒業を目指していたのに残念だ。」と語った。

夏休み後、退学や長期欠席が増えたが、学校は次第に落ち着きを見せていた。やる気の無い者が去り、残った生徒の中に著しい成長を遂げた者がいたからである。D子もその一人だった。D子はクラスの中でも学力が低い方だったが、表2で示したとおり履修した全科目（20単位）を修得したのである。未修得（不合格）が多い必履修の「簿記Ⅰ」（4単位）も修得した。3年で卒業を希望しながら、「簿記Ⅰ」が未修得のために卒業が1年延期になる生徒が毎年クラスで数名いる。4年で卒業したS子やF男が該当する。2年次の必履修科目だと「数学Ⅰ」（4単位）も未修得になる者が多い科目である。D子は修得したが、S子は未修得になった。C商業定時制の場合、必履修科目は「履修」（出席時数が充足）していればよく、「修得」（合格）していなくてもよい。但し卒業が延期になるので、4年で卒業できるように1年間で20単位前後修得するように指導する。そうすれば卒業単位が74単位以上だから、4年間で卒業できる見込みが立つ。

D子は心と身体が弱く遅刻・早退・欠席もあり、新しいことを理解するのに時間がかかる。そのD子が3年生までの履修科目をすべて修得したのは、彼女なりに努力したのであろう。D子は多くの生徒ができることでもできないことがあった。まず1年次の校外学習のエピソードを紹介しよう。

C商業定時制では修学旅行はないが、秋に校外学習で県内にあるテーマパークを訪れる。生徒は自力で交通機関を乗り継いでテーマパークを目指す。仕事で参加できない者や経済的理由で参加できない者もいるが、多くの生徒は楽しみにしている。D子は電車の乗り継ぎに不安があったようだが、朝の集合時間に間に合った。園内ではS子と行動を共にしていた。午後2時に出口近くでクラスごとに点呼をとることになっていた。点呼をとった後は帰宅してもよいし、テーマパークに残ってもよい。多少遅れる者はいたが、D子とS子が1時間以上経っても集合場所に現れない。職員で話し合った結果、途中で姿を確認しており、事件に巻き込まれた可能性は低い。後日学校で指導することになった。翌日、2人は無事に登校した。「集合場所がわからなかった。」と2人は言った。事前に指導したし、当日の朝も「午後2時にここに集合だよ。」と指導したのに集合場所がわからなかった。（2012年9月のフィールドノートより）

1年生の校外学習で失敗したD子とS子だったが、2年生から校外学習で集合時間に遅刻することはなかった。同級生のI子やその友人と行動を共にし、集合時間を守ることができた。周囲と一緒に少しずつ成長していた。

だが、2年生で大きな挫折を味わう。定時制では昼間にできるだけアルバイト²³⁾をするように指導している。授業が始まる夕方まで何もしないで家庭で過ごすのは心身の成長に良くないからだ。I子もコンビニで働いていたし、F男はガソリンスタンドで働いていた。F男はADHD（注意欠陥多動性障害）と思われる生徒だったが、1年生の夏休みからガソリ

²³⁾ 現在の定時制の生徒では正社員はごく少数しかいない。

ンスタンドで働くようになってからは落ち着き、人の話を聞けるようになった。両親とも善良でF男は素直に育ち、大人を信頼していた。D子はI子やF男に刺激を受け、2年生になってすぐコンビニで働き始めた。

D子は嬉しそうにこう言った。「先生、コンビニで働き始めました。」私は「良かったね。頑張ろうね。」と答えた。しばらくしてからアルバイトを続けているか、聞いてみた。D子はこう答えた。「マニュアルが覚えられないから研修中にクビになりました。」コンビニで働く生徒は多い。D子はコンビニでは働くことができないのか。

（2013年5月のフィールドノートより）

D子にとって研修中にアルバイトをクビになったことはトラウマになったようだ。卒業するまでアルバイトをしなかった。

また、2年生では事件があった。夏休みにD子が中国に帰国して退学したY子に会ったという。学校に来たがっている、とも言った。C商業定時制には再入学の制度がある。自己都合で退学した場合、2年以内なら面接による選考で再入学できる。Y子にも説明していた。Y子はC商業定時制に戻りたいのかもしれない。副校長に再入学の可能性もあるY子が学校に来たがっているのも、許可をもらってD子が履修している授業を一部見学させた。2013年の秋のことである。

1年ぶりに見るY子はパーマをかけており、背が高いこともあり大人びて見えた。小柄なD子と連れだって学校に来た。父が病気から回復したので日本に戻ったのだという。両親と叔母（母の妹）とS子の4人で生活しているという。一年前は働いていなかったが、今は働いている。D子が履修している授業を見学して満足して帰った。再入学の試験を受けるなら、12月か1月に学校に来るとよい、と伝えた。合格したら元の学年に入るからまた1年生になる、とも説明した。「同級生は3年生になるから、それはいやだ。」と言った。「学校の規則だから仕方がない。」と説明した。

（2013年9月のフィールドノートより）

その後、Y子からは連絡が一切無かった。再入学できるのは4月だけなので、Y子の再入学はなくなった。Y子のように本国と日本を行ったり来たり（往還）する子どもたちが学校生活を続けて行くことはとても難しい。

3.3 3年生のD子

D子が3年生になる際、退学や転学で学年の生徒が減ったため、1・2年生では4クラスだったのを規定通りの3クラスにした。一番生徒数が少ないクラスの生徒を他の3クラスに分けて振り分けたのである。D子のクラスには数名加わったが、担任は私が継続して務めた。3年生になってからは成績がやや下がったものの、友人が周囲にいて生活は安定していた。兄が就職して2年目となり収入が安定し、生活保護を受けなくなった。D子の母はPTA会費・生徒会費・諸経費など学校納入金や給食費を必ず期限内に納入していた。順調に始まった3年生だが、6月の前期中間考査で時間割を間違え1科目を受験しなかった。

地理Aの考查にD子は現れなかった。一緒に履修しているS子は時間を守って教室に来て受験した。地理Aは私の担当科目である。「何か起こったのだろうか。」と考えた。考查が終わってから廊下を歩いていると、D子がいる。「地理Aを受けなかったが、どうしたのか。」と聞いた。D子は「地理Aはこれから始まるのでは？」と答えた。その問いに対して私はこう答えた。「これからある地理Aの考查は君が履修している講座ではなく別の講座だ。」C商業定時制では同じ科目でも講座（クラス）が違っていると考查の時間が違うことがある。D子は違う講座（クラス）の時間を記憶していた。このような場合、C商業定時制では考查は欠席となり、該当科目の考查は「0点」となる。

（2014年6月のフィールドノートより）

D子はその後定期考查の時間割を慎重に確認するようになった。S子も心配して一緒に考查の時間割を確認してくれた。地理Aは残りの3回の定期考查と平常点で合格点が取れた。S子はいつもD子に寄り添ってくれた。S子の3年生のエピソードにも触れよう。

「先生、簿記では足し算だけでなく、引き算も使うのですよ。」これは3年生になったS子の発言である。簿記の初歩は金額の仕分けと足し算である。「簿記Ⅰ」が未修得のS子は、3年生では時間割の都合で上級科目の「簿記Ⅱ」を履修していた。「簿記Ⅱ」を修得できる可能性は低かったが、以前理解できなかった基本的なことが理解できるようになり、応用力もついたのである。（2014年9月のフィールドノートより）

S子は3年生で履修した科目すべて（25単位）を修得した。中学校で特別支援学級にいたS子は定時制で学ぶうちに基礎学力が身に着いた。4年生で「簿記Ⅱ」が未修得（不合格）になりそうだったD子を支えた人物の中には友人のS子もいた。彼女は計算力が無く、1年生の「簿記Ⅰ」と2年生の「数学Ⅰ」が未修得（不合格）になった生徒である。だが、各種金額の仕分けをして計算式に当てはめることが出来るようになった。計算では電卓を使用してもよいので、最終的に合格点が取れるようになった。4年生では危機に陥ったD子をいつも励ましてくれた。

3.4 危機に陥った4年生

C商業定時制の特色として3年生で卒業した者がいたので、4年生の生徒は大幅に減り、クラス替えがあった。4年生以上（4年生・5年生・6年生）の約30人を2クラスに編成し直した。

D子のクラスは15人で、S子もこのクラスにいた。このクラスには中国人の女子1人（長欠で5月に退学）と日本人の父とフィリピン人の母との間に生まれた者が3人（D子・T子・Y男）いた。4年生以上のもう一つのクラスにも日本人の父とフィリピン人の母を持つG子がいた。今まで隣のクラスにいたT子はD子やS子の友人²⁴⁾であり、D子は4年生になった当初、明るく意欲的だった。まず、通学方法をバスと電車から自転車に変更した。D子の母は危ないからと反対した。目的は通学定期代を節約し、体力をつけ、通学時間を短縮

²⁴⁾ 単位制のC商業定時制は他のクラスの生徒と一緒に授業を受けることが多いので、隣のクラスの生徒と友人になるケースは多い。

することだ。D子の家からは自転車だと15分ほどでC商業に到着する。途中で通行量の多い国道を横断するので注意は必要だが、短時間で学校に行ける。雨の日には徒歩で登校した。徒歩だと30分かかるが、大変ではない。4年生以上のクラスは前年までは1クラスだったが、4年生以上が約30人いるため、2クラスに分けることになった。D子はS子と同じクラスになり、担任は私だった。このクラスには父が日本人で母がフィリピン人の生徒が他に2人いた。2歳年上のY男と同年のT子である。それまで彼らは隣のクラスだった。4年生以上のもう一つのクラスにも父が日本人で母がフィリピン人のG子がいた。T子はD子やS子の友人である。D子は4年生の秋、給食の時間に次のように語っている。

「中学校までは自分のような(父が日本人、母がフィリピン人という)生徒はいなかった。この学校に入学して自分と同じような生徒がたくさんいるので驚いた。」

(2015年11月のフィールドノートより)

但し、I子などの友人が3年で卒業したため、友人の多くを失ってしまったという喪失感がD子を覆った。D子はさらに深刻な問題に直面した。4年生で履修した7科目(17単位)の内の2科目(7単位)が全く理解できない、という問題である。その2科目は外国語の「日中文化研究」(3単位、学校設定科目)と「簿記Ⅱ」(4単位)である。「日中文化研究」は中国語と中国文化の基礎を学ぶ科目で、S子やI子が下級生の時に履修して修得した科目であり、難しくはない。但し、復習や宿題をやらないとついていけない。D子は0時間目にある「日中文化研究」に遅刻や欠席するようになった。前期の中間考査は受験したが、「0点」だった。担当教員²⁵⁾は「宿題を全くやらない。欠席が多くて全然だめ。」と言った。加えて「簿記Ⅱ」も非常に悪い状態だった。担当教員²⁶⁾に尋ねると、このような回答が返って来た。「欠席や大幅な遅刻があり、履修と修得の両方があぶない。」前期の中間考査は「0点」であった。D子はS子と違い、1年生で「簿記Ⅰ」を修得できている。ところが、1年生で学習した内容を全部忘れて授業が全く理解できないのだという。4年生のD子は学校に不適応を起こし、現実から逃避していた。悪いことにS子は家庭の経済状態が悪化し、給食を止めていた²⁷⁾。3年生までは一緒に給食を食べてくれた友人が複数いたのに4年生になってからは給食と一緒に食べる友人がいなかった。食堂で1人のD子に気づき、私は極力D子と給食を食べることにした。食堂で待っていても来ないこともあったが、給食の時間は食堂で待った²⁸⁾。会えた時は同じテーブルに座り、「給食が美味しいね。」「S子が君のことを心配しているよ。」「授業に出席すると、少しずつ理解できるようになるよ。」などと話しかけた。4年生になって遅刻と授業の欠課が増えたD子を心配していた5月に、D子の母から学校に電話があった。その時の会話とその後の様子を書いてみる。

²⁵⁾ 台湾出身で日本人と結婚して帰化した女性。非常勤講師。

²⁶⁾ 20代の臨時的任用講師(1年契約の常勤講師)、男性。臨時的任用講師になる前は非常勤講師としてC商業全日制と定時制で教えていた。50代が多いC商業定時制の教職員の中にあっては数少ない若い教員で、勉強が苦手な生徒にも根気よく教えてくれた。D子やS子の副担任でもある。

²⁷⁾ S子は12月になってから、給食を復活させてD子と一緒に食べるようになった。S子の父は60代で非正規雇用であり、50代の母や10歳上の姉も非正規雇用と思われる。

²⁸⁾ 教職員は2時間目に授業が無い場合、2時間目に給食を食べることができる。混雑を避ける意味もある。私は給食を早く食べた日もその後、D子を食堂で待った。

学校に掛かって来た電話での会話

母「先生、D子が夜遅くまで帰って来ない。夜に帰らず朝になってから帰って来る日もある。」

私「学校は午後8時55分には授業が終わるからそんなに遅くなることはありません。どこかに立ち寄っていますね。仲の良いS子の家に寄っているとは思えません。学校で聞いてみましょう。」

母「お願いします。」

翌日の学校での会話

私「夜遅く帰るし、朝帰りする日もあるそうじゃないか。お母さんが心配しているよ。」

D子「地元の中学校の女の友人の家に寄っていました。」

私「お母さんが心配するから、寄り道する時は電話で連絡しなさい。君は未成年だから無断外泊はよくない。」

D子「わかりました。」

直後の母との電話での会話

私「D子にどこに寄っているか、聞きました。地元の中学校の女の友人の家に寄っていたそうです。地元の友人の家に行く時はお母さんに電話を掛けるように、諭しました。」

母「安心しました。ありがとう。」

(2015年5月のフィールドノートより)

D子の母は日本語で日常会話ができるが、読み書きが出来ないので、電話を掛けるように諭したのである。母は入学直後も学校に電話を掛けてきた。末っ子のD子様子を心配したらしい。友人もできて学校に慣れてきたことを話したら、安心したようだった。4年生の担任が私だと知っていたので、電話を掛けてきたのであろう。

夏休み前まで、D子は苦手の「日中文化研究」の授業に出席しなかった。友人のS子も「私もI子も単位が取れた科目だから、授業で学べば、単位が取れる。」と言って説得した。それでも出席しなかった。D子は0時間目の「日中文化研究」を含めて17単位の授業を履修していた。授業をすべて履修すると25単位だから、授業の無い空き時間が8時間ある。この空き時間があるために、ペースが乱れた。卒業条件はD子の場合、「日中文化研究」(3単位)以外の「簿記Ⅱ」を含む14単位を履修・修得することである。14単位を履修・修得すれば、バランスよく74単位になる。幸い、「簿記Ⅱ」以外の10単位は修得できそうである。「簿記Ⅱ」を履修・修得しないと卒業できない。

「簿記Ⅱ」は1年生で履修・修得した「簿記Ⅰ」の上級科目である。「簿記Ⅰ」が修得できなかった生徒が数名いた中でD子は修得している。2年間のブランクを経て忘れているのである。忘れたことは思い出せる可能性もある。継続して学べば、「簿記Ⅱ」は合格点が取れる。「日中文化研究」は未履修(欠課時数オーバー)でもよいが、D子は「簿記Ⅱ」の授業で大幅な遅刻と欠席を繰り返した。定時制の生徒は疲れると早退することが多い。D子もそのような傾向があった。だが、4年生の遅刻や授業の欠席は全然違う。学校にいるのに授業が無いS子と自習室にいた。友人の多くが卒業したため、喪失感から鬱状態になり、無気力に陥っているように思われた。気力を回復させるのには時間がかかる。このような状況下、D子は4年生の夏休みを迎えた。

3.5 危機からの脱出と卒業

C商業定時制は2学期制のため、前期期末考査は9月にある。そのため、8月下旬から授業が再開されるが、D子に変化が見られた。夏休み前に比較して表情が明るく、元気になったのである。「簿記Ⅱ」担当教員（副担任）にD子の様子を聞くと、「出席が増え、演習プリントにも取り組むようになった。」とのことだった。期末考査の点数が急に良くなると思えないが、いくらか得点できそうだった。D子に「簿記の授業が理解できるか？」と聞いたら、「少し理解できるようになった。」と答え、進歩が見られた。そこで「日中文化研究」を捨て、未履修（欠席時数オーバー）を勧めた。最後の手段である。担当教員にも「D子が受験しない」ことを伝えた。最終的に「日中文化研究」は未履修（欠課時数オーバー）になった。卒業要件は74単位以上の修得だから、「日中文化研究」以外を修得すれば、卒業できる。前期の期末考査の「簿記Ⅱ」は赤点²⁹⁾だが、得点できたのは評価できる。成績も赤点だが、挽回可能な点数だった。「日中文化研究」は未履修（欠課時数オーバー）で他の科目は30点以上の評価であった。「簿記Ⅱ」の担当教員のM講師（副担任）にD子の様子を聞いた時の場面を再現する。

私「夏休みの後、D子の様子が変わったように思います。落ち着いてきたし、表情が明るくなって夏休み前と別人のようです。授業の時のD子はどうですか。」

M講師「大幅な遅刻は無くなり、出席状況がよくなりました。また授業に積極的に取り組むようになり、課題プリントにも真剣に取り組みました。前期とは別人のようです。平常点を考慮して、後期で挽回できる点をつけました。」

私「ありがとうございます。後期もこの調子で頑張らせます。」

（2015年9月のフィールドノートより）

M講師は商業高校の出身で簿記が専門であり、成績不振の生徒にも懇切丁寧に教えていた。数少ない20代の教員で生徒からは「Mちゃん」と愛称で呼ばれ慕われていた。地理歴史・公民科（社会科）の教員である私にはサポートできない専門科目を根気よくD子に教えてくれた。授業に出席するようになってからD子も1年生で学んだことを思い出したようだ。前期の成績表を渡した後のD子との会話を記述する。

私「M先生が頑張っていることを評価して挽回できる点数をつけてくださったよ。よかったね。」

M子「先生、授業が少し理解できるようになりました。1年生で学んだことを思い出しました。」

私「秋は勉強に向いているから、後期も頑張ろう。そして4年生で卒業しよう。」

M子「はい。」

（2015年9月のフィールドノートより）

短い秋休みの後、10月上旬に後期が始まった。D子は出席状況が良くなり、給食の時間に会うことができた。楽しく食べることを心掛けたが、「12月の後期中間考査の後に1月

²⁹⁾ 落第（不合格）点のこと。C商業定時制では30点未満。但し考査の赤点ですぐ未修得になる訳ではない。考査と平常点を総合的に評価を出すからである。

の卒業考査の受験リストを作成するから、リストに載るように頑張ろう。」と何度も言い聞かせて励ました。S子が4年生で卒業できるので、D子も一緒に卒業したいのだ。

「卒業したら、今までしなかったアルバイトを始める。」とも言った。給食では職員と生徒は同じ献立を食べるので、立場を超えた連帯感が生まれる。これは夜間定時制の良いところだ。明るいニュースがあった。経済的な理由で給食を止めていたS子が、12月から再開することになった。12月は後期中間考査があり、重要な時期である。D子はこの時期の給食をS子と過ごすことが出来た。友人と給食を食べることでD子は安定した。

D子の後期中間考査の「簿記Ⅱ」は赤点ではなく、D子は無事に卒業考査の受験リストに載った。S子も受験リストに載った。卒業考査は1月下旬なので、1か月しかない。年明けの1月上旬に授業が再開された。卒業考査までは2週間余りだ。D子は簿記Ⅱの学習を継続して行い、卒業考査を迎えた。「簿記Ⅱ」以外は合格点が取れる見込みが立っていた。「簿記Ⅱ」の考査後、M講師にD子の得点を聞くと、平均点くらいだという。基本的な問題は解答できており、平常点も上がったので合格点をつけられる、という。安定した状態は担任が受け取った葉書でも読み取れる。

拝啓

〇〇先生へ

4年間、大変お世話になりました。この4年間は一生忘れません。

先生から学んだ事を今後のことにいかそうと思います。

先生もお身体に気をつけて過して下さい。

敬具

平成二十八年一月十九日

D子

書道Ⅰの担当者から担任宛てに葉書を書く課題が出たので、担任達が生徒から年賀状を受け取っていた。教員の指導が入っているので、いくらか割り引いて評価するが、担任を信頼している様子がうかがえる。S子からも同様の葉書お受け取った

2月上旬に卒業対象者の成績が出ると、卒業認定会議が開かれた。これは卒業対象者の1年次からの履修単位・修得単位が掲載された資料を用いて行なう会議である。D子とS子の2人は無事認定された。同じクラスではF男とフィリピン系のT男も認定された。隣のクラスのフィリピン系のG子も認定された。卒業が認定されたことをD子に伝えた時の様子をフィールドノートより抜粋する。

私「卒業が認定されました！おめでとうございます。」

D子「ありがとうございます！」

(2016年1月のフィールドノートより)

卒業式はD子とS子の2人とも黒のスーツを着用していた。制服が無いため、大学生のように黒のスーツを着る者がC商業定時制には多い。同じクラスのF男やY男や隣のクラスのG子も黒のスーツを着用していた。入学式では普段着の生徒も見受けられるが、卒業式にはいない。定時制の生徒にとっての卒業の喜びの大きさを表している、と思われる。

卒業式にはD子の母とS子の両親・姉が列席していた。D子の母は式後に「先生、ありがとう。」と言って握手を求めてきた。直接会うのは入学式以来であるが、電話で4年生の5月に話しており、久しぶりという感じではなかった。不安定だったD子が成長して無事に卒業したのがよほど嬉しかったのであろう。時折電話で話し、面会もしたS子の父も私に「4年間先生が担任で良かった。」と言ってくれた。S子の母や姉も嬉しそうであった。D子とS子と同じく4年間担任を受け持ったF男も「先生が担任でよかった。」と言ってくれた。彼は入学時に身長が160cm足らずだったのに、4年間で10cm以上伸びて170cmを超えた。4年間で生徒達は成長したのである。

D子は卒業後、古本屋のチェーン店でアルバイトを始めた。時折連絡があるが、「給食が食べたい。」とメッセージが入った時は嬉しかった。S子や私と一緒に食べた給食はD子の活力となっていた。D子は卒業できなかったフィリピン系のT子ともつながっており、T子の今後のことを心配している。

3.6 D子の家族に対する思い

「兄は中学生の時に苛められて家で暴れたことがあり、それ以来（怖くて）あまり話さない。」
(2013年5月のフィールドノートより)

「フィリピンのお祖母さん（母の母）が亡くなった。お母さんが大きな声で泣いていた。」
(2014年11月のフィールドノートより)

「お父さんが「お金がかかるからフィリピンに電話をかけるな。」と母に言った。悲しかった。」
(2015年11月のフィールドノートより)

「フィリピンには姉（母は再婚で、最初の結婚で生まれた異父姉妹）がいる。姉は結婚していて子どもがいる。スカイプで話したが、私はタガログ語が話せないし、姉は日本語が話せないので挨拶程度しか話せなかった。でも母と似ていて私にも似ている。とても親しみを持てた。」
(2015年11月のフィールドノートより)

これらの談話は給食の時間やホームルームの時間に、D子が語ったものである。短いものだが、家族に対する思いが伝わってくる。同居する兄は、中学生時代に家で暴れたことがあり、それ以来あまり話さなくなった。但し、D子は二歳上の兄が高校卒業後に就職して働くようになって、生活保護を受けなくなったことを理解している。だから高校卒業後は、在学中にしなかったアルバイトをしようと言っていた。兄の背中を見て成長していることがわかる。母がフィリピンに国際電話をかけることで、父が文句を言った時に悲しかった、という談話から母のフィリピンへの思いと家庭の経済事情が伝わってくる。D子は母が末っ子の自分をいつまでも子ども扱いすることを疎ましく思うこともあった。だが母が末っ子の自分のために必死に働いてくれることを理解しており、母との紐帯は強い。また母を通じフィリピンの親族との紐帯を意識している。フィリピンの祖母が亡くなった時、母が泣いたことで驚くが、フィリピンの親族との紐帯を意識している。

またフィリピンの姉とスカイプで話した時に母や自分に良く似た姉を見て、親近感を抱いた。言葉は通じないが、心は通じており姉とD子は強い紐帯でつながっている。

4 考察

外国につながる子どもたちの進学先は定時制高校・通信制高校が多い。だから私はC商業定時制に異動し、参与観察を始めた。D子の事例を通して、外国につながる高校生の学校適応にどのような因子が関係しているか、を考察する。

父が日本人で母がフィリピン人のD子は学力も低く、経済資本にも恵まれず、家庭の文化資本も貧弱である。D子は普通に考えるとC商業定時制を卒業する可能性が低い。ところが4年かけて彼女は卒業した。何が彼女の学校適応を支援したのか。

第一に考えられるのはC商業定時制で行われている少人数クラスである。1クラスの定員は40人だが、クラスを増やし1クラスを30人にしている。手のかかる生徒が多いので少しでも目が届くように1クラスを30人までに抑えている。学年が進むと退学・転校する者も出るので、本来のクラス数に戻しても1クラスは20人前後になる。少人数クラスは同級生や教員とのつながり（社会関係資本）を構築しやすい。

第二にC商業定時制の弾力的なカリキュラムである。単位制なので3年以上かけて所定の単位を修得すれば卒業できる。学習が苦手なD子は4年で卒業する計画を立て入学した。彼女は3年生までは順調に単位を修得している。4年生の二科目修得が困難に思えた際、卒業基準を上回って履修していたから、一科目を捨てて出席せず未履修にしてもう一科目を何とか修得して卒業するという戦略が使えたのである。この戦略は担任が立てた。

第三に家族の支援である。D子の母は病気の父の代わりに家庭を支え、D子の学校納入金や給食費を期限までに納入している。D子が4年生で不安定になった時、真っ先に担任に電話を掛けて相談している。（1年生で心配だった時も電話を掛けている。）D子の母は日本語の読み書きができないので、電話を掛けた。担任もD子を心配していたので、すぐにD子と面談をしてその時の様子を母に伝えている。家族が本気になって子どものことを心配していると教員も指導しやすい。母と担任が同時に自分を心配していると聞いたD子は担任の指導に素直に従っている。また、2歳年上の兄は高校卒業後に就職して、家計を母とともに支えている。D子は兄とはあまり話さないが、兄が働くようになってから生活保護を受けずに済むことを理解している。さらにD子には父が異なるフィリピンの姉がいて、精神的な支えになっていた。「スカイプで話した時、姉は日本語が話せず私はタガログ語が話せないのに、母と良く似ている姉を見て嬉しかった。」とD子は語ったことがある。病気の父に代わって、末っ子で精神的に幼いD子を他の家族が物心両面で支援している。

第四に友人の支援である。特に3年生まで一緒に授業を受けて給食を食べる友人（I子・S子など）が複数いて共に励まし合って学校生活を送り、履修した科目の単位を全て修得できた。4年生での危機も地元の友人と話をしてストレスを発散しているし、S子が学校でサポートしている。D子は地域でも学校でも友人がいて孤立していない。

第五に教員の支援である。担任は4年生までずっと変わらなかった。4年生で不適応状態にあったD子に対して長期にわたって登校時や給食の時間にアドバイスをしている。1年生から構築した担任との信頼関係はD子を支援した。また簿記Ⅱの担当者であるM講師は、欠席や遅刻を繰り返すD子を根気よく指導して簿記の基本を思い出させ、さらに上級の段階へ導いている。

第六にD子本人の成長である。夏休み後、D子は生まれ変わったように簿記Ⅱの授業に取り組んでいる。夏休みが彼女の心身の疲れを回復させ、学習に取り組む気力を育てた。

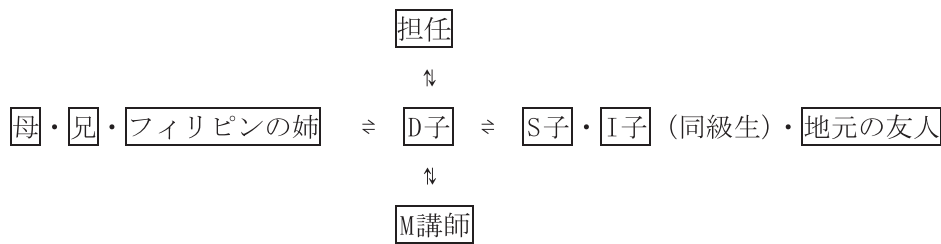


図 D子の社会関係資本

これは見落としがちな因子であるが、注目したい。

第一と第二はC商業定時制の特色である。第三・第四・第五はD子を支えた人間関係であり、社会関係資本と言い換えることができる。経済資本・文化資本に恵まれないD子は社会関係資本には恵まれていた、と言える。D子は社会関係資本によって失っていた「意欲」を取り戻し、苦手な授業に出席するようになった。社会関係資本の効力については私が2016年に書いたプロジェクト論文³⁰⁾を参照されたい。

第六は4年生で卒業する生徒全体に言えることだが、「本人の成長」である。「定時制の生徒は、4年生になると急に成長する。」これは同僚の言葉である。私も同感である。末っ子のD子は、母や兄・姉からの支援が得やすかった。また、友人は少数ながら地元と学校の両方にいてD子を支援してくれた。さらに担任が4年間変わらず継続的な指導をした。苦手教科の「簿記Ⅱ」担当のM講師は不適応だったD子を根気よく指導した。経済資本や文化資本に恵まれていないD子は、社会関係資本には恵まれ危機から脱出した。

5 結論

社会関係資本概念が、外国につながる高校生など学力形成に困難を抱えているとされる高校生たちに対する支援の現状と可能性をとらえる上で有用であることが明らかになった。また、退学者が多い夜間定時制高校は、服装・頭髮の自由・少人数学級・豊かな社会関係資本・弾力的なカリキュラム・ゆっくり時間をかけて単位を修得することも可能なシステムで外国につながる生徒を受け入れやすく、彼らの学校適応を支援している。今後も夜間定時制高校での参与観察を続け、社会関係資本に注目して、外国につながる高校生たちの学校適応について、さらに考察を深めていきたい。

6 参考文献

- 「外国につながる子どもたちの物語」編集委員会編 まんが・みなみななみ（2009）
『まんが クラスメイトは外国人 多文化共生20の物語』明石書店
佐久間孝正（2006）『外国人の子どもの不就学 異文化に開かれた教育とは』勁草書房
佐久間孝正（2015）『多国籍化する日本の学校 教育グローバル化の衝撃』勁草書房
志水宏吉（2005）『学力を育てる』岩波新書
志水宏吉（2003）『公立小学校の挑戦 「力のある学校」とはなにか』岩波ブックレット
志水宏吉（2014）『「つながり格差」が学力格差を生む』亜紀書房
志水宏吉・清水睦美編著（2001）『ニューカマーと教育 学校文化とエスニシティの葛藤をめぐる』

³⁰⁾ 小川洋二（2016）「社会関係資本—学力形成を支援するもの」

（米村千代編（2016）『流動化する社会と紐帯』千葉大学大学院人文社会科学研究科研究プロジェクト報告書第301集pp. 109-125）

明石書店

志水宏吉・中島智子・鍛冶到編著 (2014)

『日本の外国人学校 トランスナショナリティをめぐる教育政策の課題』明石書店

清水睦美 (2006) 『ニューカマーの子どもたち 学校と家族の間の日常世界』勁草書房

鈴木大介 (2014) 『最貧困女子』幻冬舎新書

趙衛国 (2010) 『中国系ニューカマー高校生の異文化適応文化的アイデンティティ形成の関連から』御茶の水書房

野沢慎司編・監訳 (2006) 『リーディングス ネットワーク論 家族・コミュニティ・社会関係資本』勁草書房

パットナム著・柴内康文訳 (2006) 『孤独なボウリング 米国コミュニティの崩壊と再生』平凡社
(BOWLING ALONE: The Collapse and Revival of American Community by Robert D. Putnam, 2000)

山本悦子 (2016) 『夜間中学へようこそ』岩崎書店

米村千代 (2014) 『「家」を読む』弘文堂

小川洋二 (2016) 「社会関係資本—学力形成を支援するもの」

(米村千代編 (2016) 『流動化する社会と紐帯』千葉大学大学院人文社会科学研究科研究プロジェクト
報告書第301集 pp. 109-125)

高松美紀 (2011) 「多文化を背景に持つ高校生の学校適応に関する研究—一定時制高校を事例に一」(日本
教育社会学会大会発表要旨集録 (63) pp.316-317)

宮下与兵衛 (2013) 「子ども・若者の貧困と学ぶ権利の保障—全国の状況と一定時制高校の現場から」

(教育科学研究会編 (2013) 『地域・労働・貧困と教育』かもがわ出版 pp.247-264)